

連載 アメリカ経済史に学ぶ

第16回 「危機の時代」の指導者像

明治大学政治経済学部
専任講師・博士（経済学）
下斗米 秀之

新年度を迎え、対面授業が解禁された大学のキャンパスにも賑わいが戻ってきた。変異ウィルスの増加やワクチン接種の遅れなど、まだ油断はできない。

ウイズコロナという困難な時代に求められる指導者像とは何か。最近出版された『フランクリン・ローズヴェルト』（注1）は実に多くのヒントを与えてくれる。歴史学者や政治学者が選ぶ歴代大統領ランキングでも、リンカーンやワシントンと並んでトップクラスの人気を誇るローズヴェルト。名門の家に生まれ、過干渉な母と高齢な父のもとで育ち、弁護士を経て政治の世界に飛び込んだ。世界大恐慌と第二次大戦という二つの危機に挑んだ20世紀を代表する指導者だ。大戦下の酒豪チャーチルとの親交の記録は、その後の国際政治に大きな影響を与えただけに、歴史の舞台裏を覗き見したような気分させられる。ポリオとの闘病生活や愛人との交際など、プライベートな記述も豊富で読みやすい。

ローズヴェルトの代名詞ニューディール政策の評価をめぐるのは論争的だ。社会保障が整備されず、飢えと恐怖とが社会に蔓延した時代に、失業者を減らし、社会保障を整備して国民の不安を和らげたローズヴェルトの功績は大きい。市場経済に対して国家が大胆に介入して国民生活を助ける「大きな政府」は、その後の民主党政権の基本的な考え方となった。

一方でニューディール政策は場当たりの一貫性に欠き「あらゆることをなんでも試した」政策であったことでも知られる。ローズヴェルトは民間需要の不足分を政府が補うことの重要性を説いたケインズ経済学を十分に理解せず、事業効果の小さい財政政策に終始した。社会的弱者に多くの恩恵をもたらしたというイメージとは裏腹に、1920～30年代にかけて所得分配は変わらず、構造的な不平等は解消されなかった。実際にアメリカが大恐慌を克服したのは、第二次世界大戦以後のことである。政治的な判断を優先し、人権の擁護や人種平等の実現に向けた取り組みに消極的だったとの批判も強い。

とはいえ、高いコミュニケーション能力で自分の考えを国民に伝え、国民を勇気づけたローズヴェルトは、コロナ禍の指導者に求められる資質とも重なる。その時々状況に合わせて政治的な妥協を繰り返し、考え方を柔軟に変えつつ、実験的な政策に果敢に取り組むその姿は、未知の危機との向き合い方を教えてくれる。レーガンやオバマなど、その後の歴代大統領がローズヴェルトを「モデル」とした所以である。

「品位、公正、科学の力」を最優先すべき価値と掲げ、アメリカの理想を語るバイデンの姿は、1932年のローズヴェルトに重なる点があると佐藤はいう（注1）。バイデン大統領には、ローズヴェルトが先送りしたアジア系や黒人に対する人種差別問題に向けた指導力も発揮してもらいたい。

—以上—

（注1）佐藤千登勢（2021）『フランクリン・ローズヴェルト - 大恐慌と大戦に挑んだ指導者』、中公新書